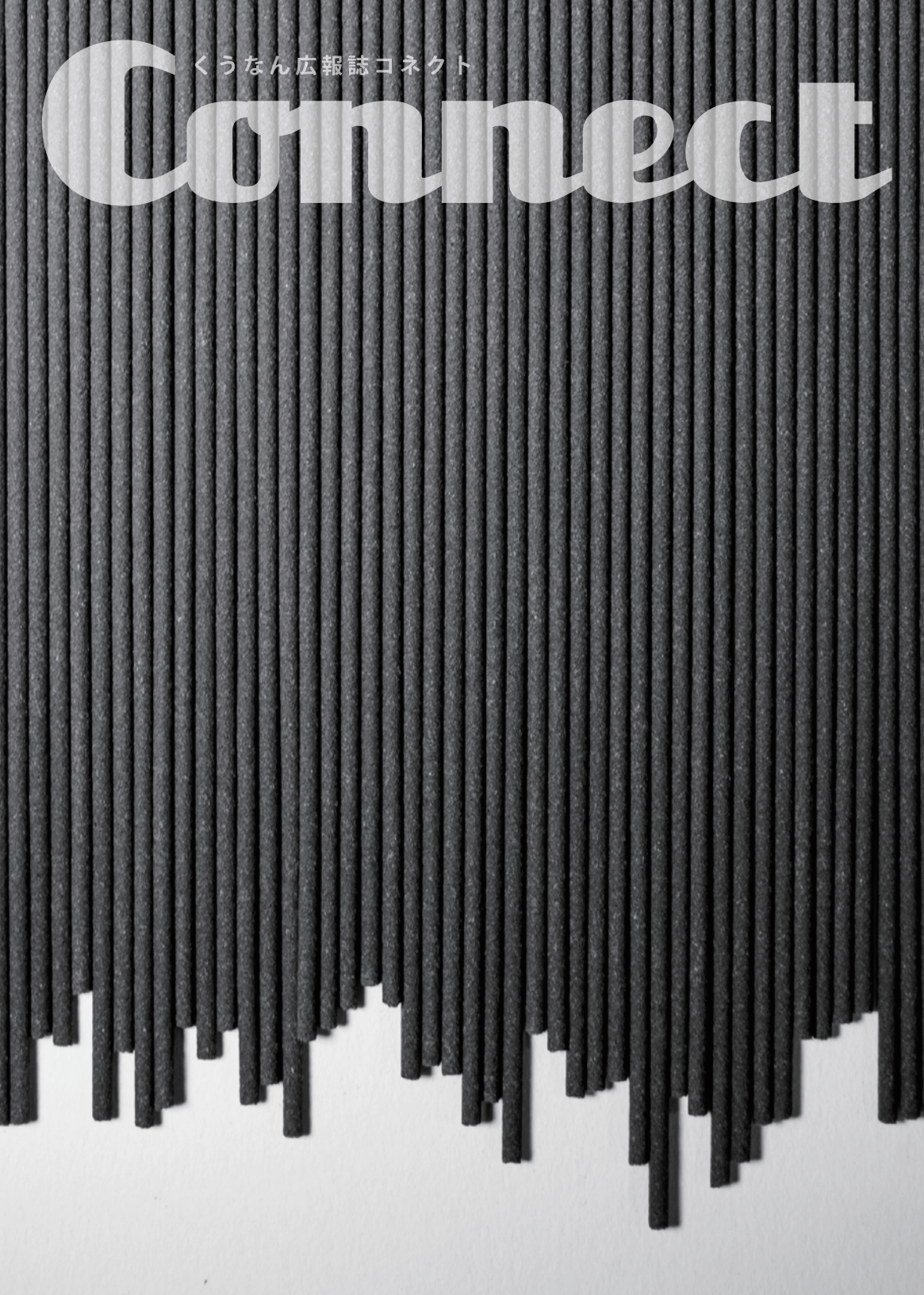
くうなん広報誌コネクト

Connect



香りの記憶

ふとした懐かしい香りがきっかけとなり、遠い記憶が蘇る。
そんな経験は誰もがあるはずだ。
人とすれ違った際に香る香水から、昔の恋人を思い出す。
どこからか漂うカレーの香りで、家族の温かい情景が浮かぶ。
香りが導く記憶への旅は、ドラマチックなものから、ほろ苦いものまで人それぞれ。
香りは嗅覚への感受だけでなく、美しい記憶を生み、鮮明に蘇らせてくれる。
そんな香りのなかで、人々の心に安らぎを与えてくれるお香。
その香りを嗅ぐと、実家や祖父母の家での幼少期を思い出すという声を聞く。
きっとそこには仏壇があり、誰かが香を焚いた香りが家に染み付いていたのだろう。

信仰から日常へ

ある特定の香りで昔の記憶や感情が蘇る現象はプルースト効果と名付けられている。フランスの作家マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』という小説の中で、主人公がマドレーヌを紅茶に浸したことをきっかけに幼少期がフラッシュバックする場面。その描写からプルースト効果と呼ばれるようになった。

お香の歴史は紀元前までさかのぼり、古代エジプトや古代インドでは、すでに香木や香料が宗教儀礼に使用されていた。

お香の文化はインドから仏教と共に伝播したという。日本にお香が伝わったのは、仏教伝来（538年頃）と同時期だと推察されている。香木の主な産地は東南アジアで、日本では産出されない。

日本においてお香の最も古い記述は『日本書紀』にある。推古三年（595年）、淡路島に沈香（香木）が流れ着いた。何も知らず薪にして竈にくべたところ、あまりにも良い香りがしたので驚いた島民が天皇へ献上したという記録がある。

奈良時代には鑑真和上が仏教と共に様々なお香を日本に伝えた。平安時代に入ると、香りを楽しむ文化が貴族の生活に取り入れられる。このことは『枕草子』や『源氏物語』などの文学作品に見ることができる。さらに様々な香木を聞き比べる「聞香」へと発展し、室町時代には茶道・華道とともに香道が形成された。「聞く」という表現は、聞酒や聞香のように、集中して味覚や嗅覚で判断する味わいに「聞く」という文字が使われる。江戸時代に入り、中国から伝えられた技術により棒状のお香が初めて作られた。竹線香という竹の芯に練った香を付けたものが起源とされる。簡単かつ長時間使用できるので、広く一般に伝わり、現在の線香へと発展していった。

「源氏物語画帖/梅枝」徳川美術館蔵

薫物合わせをする光源氏と兵部卿の宮。
調合したお香を披露し競い合う場面が描かれる。

香が染まる

そもそも仏教においてお香を焚く理由は何だろうか？お香の香りは体臭などの悪臭を除き、心身ともに落ち着かせ、仏さまや経典を扱う際には敬いの心を以てお香をお供えしてきた。

また、私たちすべてのものを平等に包み込む香りを、仏さまの心や教えとしてあらわしている。

親鸞聖人は著書の中に「染香人」という言葉を用いた。その左訓（聖教本文に対する注記の一種）には「かうばしき香、身に染めるがごとしといふ」と示されているが、良い香りは自ずと衣服に染み込み、さらには周りに良い香りを放つようになる。同じように仏法をお香の移り香にたとえ、仏法を大切にされている人を「染香人」と讃えた。

お寺や家に染み付いた線香の香りはただのにおいの移り香ではない。その香りは、信仰を、あるいは仏壇でのお参りを大切にされた方々の歴史や記録であり、その心を私へ伝えてくれたご教示ではないだろうか。

仏前でお香の香りに触れたとき、仏さまや仏となった大切な方々の願いに包まれていることに気づかされるかもしれない。そしてその気づきはまた移り香となり、次の世代へと伝わり、誰かがその残り香を聞くだろう。

【参考文献】
浄土真宗本願寺派
総合研究所
『季刊せいてん』
本願寺出版社

01　なぜ線香を立てずに横にするのか？

浄土真宗の本山である西本願寺では、開門から閉門までお香を欠かさない。常香盤と呼ばれる大型の香炉の灰に幾何学模様の溝を型押しし、抹香と呼ばれる粉末状のお香を敷き詰める。そこに火をつけることで、長時間お香を絶やさない工夫がされている。私たちが用いる線香の置き方はこれに準じたもので、横にして（寝かせて）お供えすることになっている。

01　02　03

04　05　06

02　白檀

ビャクダン科の芯材部分。インドマイソール原産の「老山白檀」が最高品質。

03　伽羅

ベトナムの一部でしか産出されない香木。現在は産出が無く、希少価値が上昇している。

04　服屋さんのお香

ネペンテスというセレクトショップが販売するお香。白檀ブレンドの和の香りを楽しめる。

05　薫玉堂

西本願寺出入りの薬種商として創業。日本最古の御香調進所として伝統を守り続けている。

06　天然香料の線香

薫玉堂の商品で、花や果物の香りが人気。各色それぞれに、連想するコンセプトがある。

DHARMA

灯・花・香

法話　天野廣海

私たちの家の奥の奥に仏壇が置いてあります。先祖から受け継いで来た古いもの、またご本人が購入した新しいもの、家の一番大事な所に置いて朝夕お参りをする習慣を受け継いで今日に至っていることと思います。

そのお仏壇は一言で言い替えると「教壇」であります。今は見かけることが無くなりましたが、以前は学校の教室に必ず一段高い教壇があり、そこに先生が立って勉強を教えて下さいました。仏壇も阿弥陀様（先生）が私たち人間（生徒）に、教えを聞いてくれよ、教えを規準にして生きてくれよ、教えを聞いて仕合わせに暮らしてくれよと、教えが自ずから形になったものがお仏壇であります。ですから、お仏壇全体、ご本尊のお姿、その前に飾られてある仏具、全てが教えを表しているのであります。

その中でお仏壇があれば宗旨が変わっても必ずお供えしなければならない三点セットがあり、その三つを通して仏さまの教えを表して下さっています。

一つはローソクの灯火、仏さまの智慧を表しています。光が点くと明るく、消えてしまうと暗くなります。何をもって明るい暗いと言っているのでしょうか。それは道理が通るか通らないかであります。あの人は道理に明るい、道理に暗いと言います。お仏壇のローソクの灯火は私たちに道理をわきまえてくれよ、暗闇の中を右往左往している私に向かってこの阿弥陀の教えを灯火とし、たよりにして人生を生きてらっしゃいと教えて下さっているのです。

二つめはお花であります。あの四季折々に飾られているお花を眺めていると、ニッコリと微笑んでいるように思います。しかしあの花も根を切られていますので、いずれ枯れて散っていかなければなりません。しかしその瞬間瞬間を精一杯咲ききっています。その花を眺めながら、私もいつかは死んでいかなければならないいのちを今生きております。そのいのちを精一杯生きよと教えて下さっています。

三つめはお香であります。人間の体臭を消す目的で発達してきたもので、仏さまの前に座るときだけでも清浄な香りを身につけてお参りをする為にお香を焚きます。また私たちは身体ばかりが汚れているわけではありません。心も煩悩（欲、憎しみ、腹立ち）で汚れています。その心の汚れにも気づかせていただき、お恥ずかしいお粗末な私ですと知らせていただくのが、お香を焚くことでもあります。

お仏壇に座りローソクの灯火、きれいに飾られたお花、お香の清浄な匂いを嗅ぎ身に纏いながら仏さまのお心、お働きを知らせていただきたいものです。

天野 廣海（あまの こうかい）長沼町　誓報寺　前住職

kūnan Column

もうひとつの物語

ごちそうさま。

初雪が降った11月。前回に引き続き狩猟に同行した。

早朝の山で立派なツノを生やしたオスのエゾシカを発見した。車で移動中だったので撃つことはなかったが、黒々とした冬毛が真っ白な雪景色と対比して、とても美しい。

株式会社アイマトンのエゾシカ加工施設「北海道シュヴルイユ」には年間6百頭から8百頭のシカが運ばれてくるそうだ。

「鹿肉はウマいんだよ」施設スタッフの方が話してくれた。捌き方がわからない一部のハンターが、シカ肉は臭いものだというイメージを植え付けてしまったと語る。実際、空知には2019年までシカ肉の加工施設が無かった。

なぜ本コラムが豚でも牛でもなくシカなのか。それはエゾシカが有害鳥獣に分類されるということにある。

北海道におけるエゾシカの推定生息数は、令和元年度で67万頭と言われ、増えすぎたエゾシカによる森林被害は全道に拡大している。野生鳥獣による農林業被害の中で、全体の8割はエゾシカによるものだ。近年は年10万頭以上が捕獲され、その多くが廃棄で終わってしまう。言い換えれば多くのいのちが無駄になり、賛否両論あるのが実情である。その中でごく一部ではあるが、ジビエとして出回るようになった。

私たちの「いのち」は、多くの生き物の「いのち」でつながれている。それにもかかわらず、そのことを省みる機会が少ない。実際、お店に並ぶ豚や牛が死ぬ瞬間に立ち会うことはほぼ無いだろう。シカに関しては家庭の食卓に馴染みが無いかもしれない。しかし、どちらも人間の手によって奪われた「いのち」なのである。

後日、同施設が加工したシカ肉を食べてみる。臭みもクセもない味はウマい。私は多くのいのちと多くのご苦労により生かされていると、そのご恩に改めて気づかされる。いただきます、ごちそうさま。時に、私たちは手を合わせ、簡単なはずの言葉は堂々と忘れる。

［食後の言葉］

尊いおめぐみを
おいしくいただき、
ますます
ご恩報謝（おんほうしゃ）につとめます。
おかげで、
ごちそうさまでした。

くうなん広報誌コネクト

Connect

Connect

［くうなん広報誌コネクト］ 発行／空知南組
Vol.002 2021年1月発行 編集／空知南組広報部

くうなん 検索

くうなん公式ホームページはこちら

［砂川市］西願寺 ［歌志内市］廣大寺 ［上砂川町］證法寺、西法寺
［奈井江町］西本寺 ［美唄市］法王寺、正教寺、蓮教寺、常光寺
［三笠市］善行寺、真法寺、善照寺 ［由仁町］本覚寺、鶴林寺
［栗山町］唯専寺、教覚寺 ［南幌町］妙華寺 ［長沼町］誓報寺
［夕張市］萬行寺、永福寺、願正寺、照行寺 ［岩見沢市］大安寺
願王寺、本向寺、隆王寺、静雲寺、光明寺、報恩寺、正滝寺、賢誠寺

私たちは北海道南空知地区を拠点として活動する浄土真宗本願寺派寺院の団体「空知南組」、通称「くうなん」です。

Connect（コネクト）という誌名は、くうなんのスローガンである「つたわれ つながれ」が由来となっています。

撮影協力
South2 West8
取材協力
負野薫玉堂
株式会社アイマトン